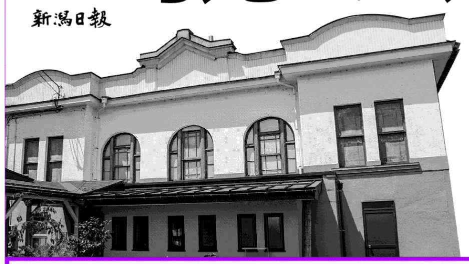
(C)新潟日報社　無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します

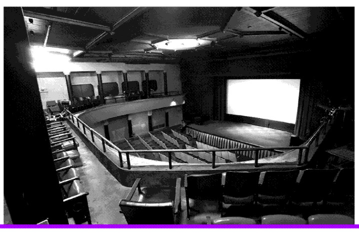
未来のチカラ in 上越
つたえる つなげる つかえる
新潟日報

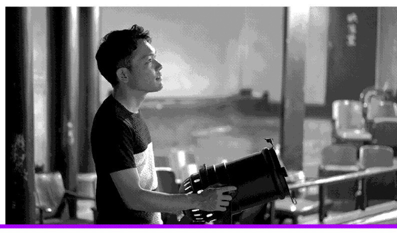
挑め、上越。

Joetsu Challenger's INTERVIEW

上越チャレンジャーズインタビュー







#003

映画館から、まちづくりへ。

高田世界館

上野迪音（うえの みちなり）

(31)

まちに個性を。次の世代につながる高田をつくる。

「高田世界館」は1911(明治44)年、高田本町6丁目に劇場「高田座」として誕生。現存する日本最古の映画館と言われ、108年たった今も毎日営業している(火曜定休)。一人の青年の、まちと映画への情熱が映画館を動かしていると言っても過言ではない。彼の思いを受けとめる上越の人たちの心も温かい。歴史ある建物に普段着でやってきて映画を見ている。そこには、とても穏やかな空気が流れていた。

僕が高田世界館の支配人になったのは、2014年のことです。高田世界館は1970年代から成人映画専門の映画館になり、2000年代後半までは細々と続いていました。しかし、建物の老朽化が激しく、修繕には大きなお金がかかる状態で、オーナーは頭を抱えていました。そのときに、市民で活用を考えようとNPO法人「街なか映画館再生委員会」が立ち上がったのです。NPO法人ができてから最初の数年間は市民に寄付を募り、建物の補修をしつつ保存に向けての準備が進んでいました。

その5年目に僕が来ました。ちょうど保存から活用へという転換期でした。以前は単発の上映会やイベントが行われるだけでしたが、そこからは毎日上映している映画館へとかじを切りました。コンテンツをどんどん投入して、8月には「ボヘミアン・ラプソディ」を上映しましたし、話題の「新聞記者」は現在も上映中です。

30年以上続いた成人映画館は地域とのつながりも乏しく、一般映画会社との取引もゼロでした。一般作品を上映するマーケットをイチからつくり、いまでは海外大手配給会社とも取引ができるようになったのは、地方の小劇場としては大きな前進です。ありがたいことにお客さんも増えて、いまでは年間15,000人が高田世界館を訪れてくれるようになりました。

全国に高田世界館のことが知れ渡ってきたのはPR効果もありますが、イベント上映や映画を見ながら騒ぐ「マサラ上映」、いまでは全国で見られるようになった「応援上映」などを積極的にやってきたこともあると思います。

映画館では音楽イベントも月に2、3回行われているのですが、いま挑戦しているのは、グランドピアノの設置です。古くてちょっとゴージャスな雰囲気の映画館は、アコースティックなライブにぴったりです。今年に入ってクラウドファンディングで資金を募り、レンタルではありますがピアノの設置を実現し、7つもの音楽公演を開催しました。ゆくゆくは常設化をしてアーティストたちが「この会場でやりたい」という環境づくりを目指しています。ツアーの時に「富山か金沢の次は上越の高田で」と言われるようになったらいいですね。180席とキャパは小さいですが、いまの時点でいくつかオファーもいただいています。

音楽などのイベントのほかに、観光ツアーで「日本最古の映画館」を見学に来るお客さまもいらっしゃいます。いまは収入の大半が映画ですが、音楽などのイベント収入、観光などの見学料収入も増えてきています。

支配人になったときの覚悟ですか？そんなの全くなかったです。逆に、いまの方が覚悟はあります(笑)。僕は大学に8年間在籍して、自分探しのモラトリアムをやっていました。当時は、将来に対する不安なんて全くなくて、正直いうと「どうなってもいい」と思って高田世界館に入ったのです。

大学時代は東京の阿佐ヶ谷に住んで、まちのサブカルチャー的なものにものすごく影響を受けました。飲み屋街があって、そこに集まる人も面白くて。大学で映画の評論を学びましたが、それ以上に阿佐ヶ谷のまちからのフィードバックが大きかった。阿佐ヶ谷のまちを面白いと思えたからこそ、高田に帰ってきても能動的に何かを見出すことができたのです。受け身的に、帰郷のたびに「高田はさびれているなあ」と思っていたら何も始まらなかった。いまでこそ高田の町家はいい！と胸を張って言えますけど、小さいころから住んでいた町家は自分にとっての「恥部」でした。町家はリノベーションされていれば別ですが、普通は古くて寒くて暗いのです。だから家の中は、きれいじゃなかった。

それが恥ずかしくて小学校から高校まで家に友だちを呼ぶのが、すごく嫌だった。いまでも広いリビングとか、ベランダとか、陽がさすテラス席への憧れは人一倍強いです(笑)。東京に行ったら冬は毎日晴れているじゃないですか。「こんなに晴れているのだから、人間も明るくなる」と思いました。僕の人間性の暗い部分は町家によってつくられたのだなあと(笑)。

そんな地元へのネガティブな思いが変わってきたのは、上越でまちづくりをやっている人や、NPOの岸田國昭代表との出会いからです。帰省するたびに、彼らから東京の建築系の大学が高田のまちに研究に入っていること、住民のあいだでも活発にまちづくりのイベントが開かれていることなどについて聞くことができました。

彼らのインテリジェンスが、それまでの僕にとっての恥ずかしかった対象、隠さなくちゃいけなかった部分に客観的な光をあててくれたのです。例えば、町家の形態はみんな一緒です。「ミセ」「茶の間」「表二階」「裏二階」という呼び方は、自分の家しか通じないと思っていたら、お隣も同じ呼び方をしていて、僕の中の暗い歴史は、実はみんなの歴史として一般化されていたのです。そうした気づきの中で自分の「恥部」を受け入れることができたのです。

いまも、昔の僕のように、町家に対して引け目を感じている人はたくさんいると思います。だから町家がどんどん壊されていき、明るくて広い郊外に出ていくのも当然の流れです。普通に暮らしていたら暗いのを明るくするのも当たり前で、駐車場を造るために町家を壊すのも当然のこと。昔の人も便利だったらそうしていたでしょう。車のない時代は、町家の造りが便利だったから、このまちの形態になったのです。だから町家を残すという問題はとても難しい。まちの景観をよくするために「家の前に必ず雁木をつくってください」とか「色を塗るときにはこういう色にしてください」とかね。まちづくりのエリートが上から指導して、高田のまちづくりが成功するかと言ったら絶対そんなことはなくて、少しずつ意識を変えていくことしかできないのです。僕自身は、映画館が一段落してきたので、まちづくりに少しずつ力をシフトしていきたいと思っています。

具体的には、いま映画館の隣が空きスペースになっていて、その活用も上越市から業務委託されています。5月にはマーケットを開き、7月は子どもを集めて七夕会、8月は子ども向けの縁日、9月はビアガーデンをします。このスペースの活用については、もっと市民に関わってもらえるような仕組みを考えていきたいです。いまは、月1のペースですけれど週1になったら、めちゃくちゃ熱いですよね。映画館を含めた交流スペースの取り組みに関しては国も注目していて、視察の件数も年々増えてきています。市民の方々の力で回り始めるまで僕が実績を重ねて、こういう絵が描けますというのを示していきます。

もうひとつ、ものすごく気になっているのは高田のまちで100年以上続く「四・九の市」と「二・七の市」です。明治時代に陸軍が高田城に入城したときに人の流れが変わり、市ができたと聞いています。いま、生きる文化としての朝市が消えそうで、黄色信号がともっています。市に行くとゴザを敷いておばあちゃんがちょこんと座って「これいかがですか？」と言うのです。全く観光化されていない、高田の宝ですね。

僕が子どものときも、学校の活動で、この市で野菜の苗を買って栽培をして収穫。その野菜を今度は市で売るという体験をしました。いまも、この社会教育は続いています。売る場所があるって、すごいことです。コミュニケーションがあり、人と視線をあわせてやりとりする場がある。高田には、たくさんのリソースがある。それを使って地域教育が行われる流れが生まれつつあります。この教育がまちづくりに対する意識を変えてくれると信じています。時間はかかりますが教育は大事です。

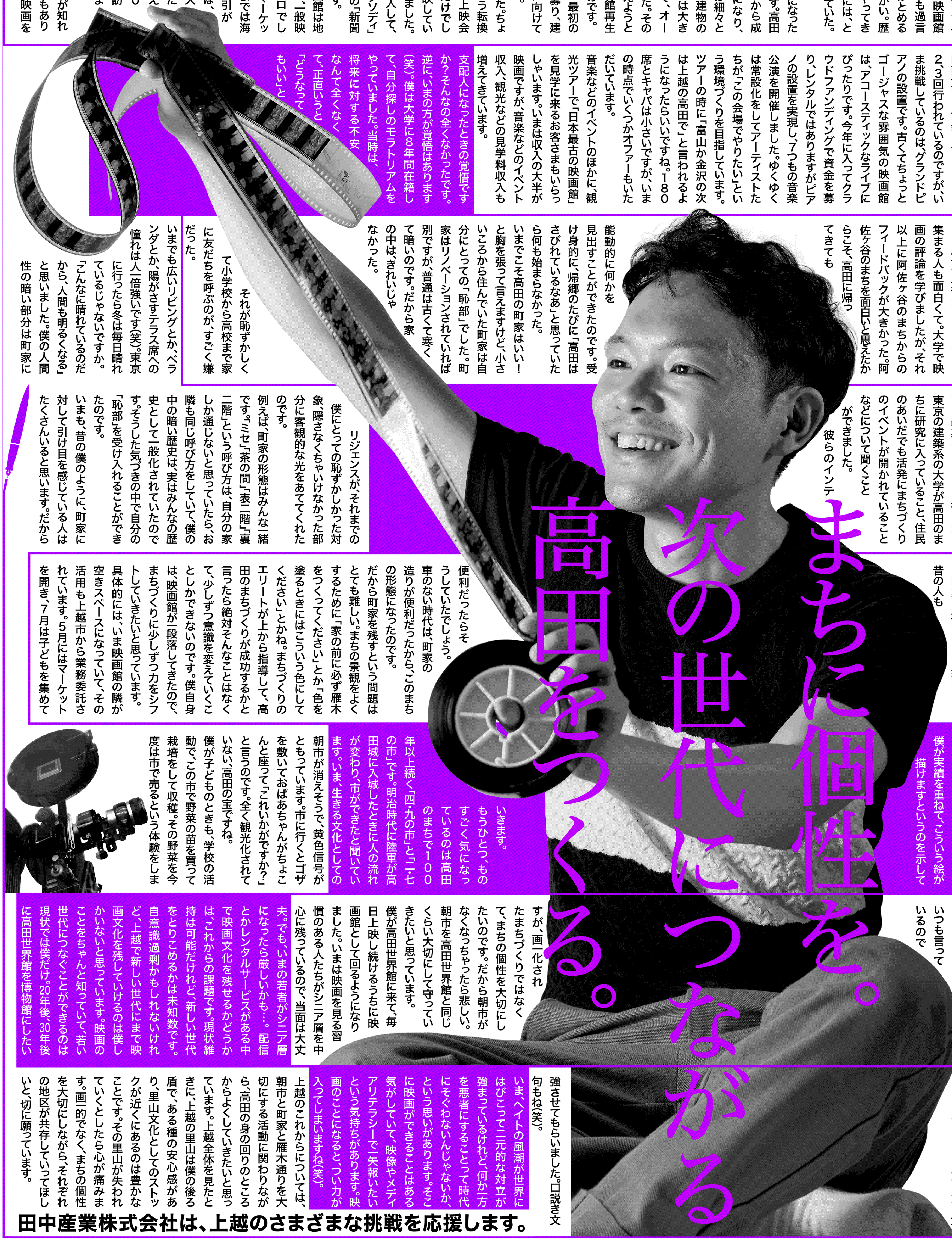
いつも言っているのですが、画一化されたまちづくりではなくて、まちの個性を大切にしたいのです。だから朝市がなくなっちゃったら悲しい。朝市を高田世界館と同じくらい大切にして守っていきたいと思っています。

僕が高田世界館に来て、毎日上映し続けるうちに映画館として回るようになりました。いまは映画を見る習慣のある人たちがシニア層を中心に残っているので、当面は大丈夫。でも、いまの若者がシニア層になったら厳しいかも…。配信とかレンタルサービスがある中で映画文化を残せるかどうかは、これからの課題です。現状維持は可能だけれど、新しい世代をとりこめるかは未知数です。自意識過剰かもしれないけれど、上越で新しい世代にまで映画文化を残していけるのは僕しかいないと思っています。映画のことをちゃんと知っていて、若い世代につなぐことができるのは現状では僕だけ。20年後、30年後に高田世界館を博物館にしたいなら、僕は必要ないかな(笑)。

映画には僕自身が救ってもらった部分がかなりあり、自分をつくってくれたのは映画だという思いがあるから、映画界にも恩返しがしたいのです。映画がなければ自分の世界は広がらなかった。もっと偏屈な人間になっていたと思います。映画は海外にも目を向けさせてくれたし、相手に対する思いやりとか、コミュニケーションの取り方を勉強させてもらいました。口説き文句もね(笑)。

いま、ヘイトの風潮が世界にはびこって二元的な対立が強まっているけれど、何か一方を悪者にすることって時代にそぐわないんじゃないか、という思いがあります。そこに映画ができることはある気がしていて、映像やメディアリテラシーで一矢報いたいという気持ちがあります。映画のことになると、つい力が入ってしまいますね(笑)。

上越のこれからについては、朝市と町家と雁木通りを大切にする活動に関わりながら、高田の身の回りのところからよくしていきたいと思っています。上越全体を見たときに、上越の里山は僕の後ろ盾で、ある種の安心感があり、里山文化としてのストックが近くにあるのは豊かなことです。その里山が失われていくとしたら心が痛みます。画一的でなく、まちの個性を大切にしながら、それぞれの地区が共存していってほしいと、切に願っています。



田中産業株式会社は、上越のさまざまな挑戦を応援します。